



うらなひの物語

十三

^ 12
4108
13



4108
13

利10
4108
13-13

宇治拾遺物語卷第十三目録

- 一 上緒主得金事 ありをのめりうらかひを
- 二 元捕落る事 もとすけらるる
- 三 俊宜速神にあふ事 とよののまはやくかみ
- 四 かたはて買てしこれ事 かたはて
- 五 羨買人乃事 ゆめ
- 六 大升光遠妹強力事 おほしり
- 七 或唐人女此に流しにひまれたる不意に殺事 あるたり



古今和歌集

二

八 出雲守別当此縣の森を家城よりありて露

志して食事

九 念佛僧魔性生事

十 慈覚大師入顯顯城路事

十一 汲天僧入元事

十二 寐照上人飛符事

十三 法源川聖乃事

十四 優婆岬多牙子此事

佐藤藏書

同書

今者むう。兵部佐ある人ありをりて冠乃あきを
れありていもあきとを名の人あきをの如しとせん
法をせりて法源乃八業と京極と八島の中にあや
し乃小家ありてうれまう人をりやとて夕をもち乃
志をれいこの家にはるよりと有りていつぬいれ女
即ちありて法引入て夕を法をいれそや
り家小年横乃屋らひる石のあはに虎をうら
りてわたり小石城をらてこの石城はまらるる
よきと能かるる道とてうれくちをもちると法を
これぞ金色よひりぬ希ふのあとの所とれにれ
そをもちると法よとぬりやうて女にそを

正始一三

て乃ねえびとれねそ女乃乃ふ屋う何乃石に付
らんむりしとどかしてゆるけり昔去者の家か
むわりあるこの家の倉ぞもれあははくふちりと
識よれども大なる所もへ乃石ぞもありまふらうの
庵をせ行つるおいられ倉のあと城ももきたつ
係とらう務むる方にた乃志とより堀を造て付り
うまがむる倉乃うらに付造たうきのまんとおれ
い女もちあふよまう御乃見へき屋もしひきね
おくじくかしてを能くゆるけりといふを造た
されこのつとあそんはよ同くせあるあもつと
はく係とれたれい女よふ屋うこの石我あそん

よとつれをれども御事に付りといふをれども
庵んよ志うそする下人をむれ車をかりに御して行ん
そぞんとま家かたに綿絹をぬきてきくはそんが
つと御かまうをれども乃女よとせ流かもきてさ
なままがふ乃石も女ももいとやう御物と思れ
ぞと家家のよもそつと御して行ふも御れあるなりま
たきとにそんろとそつとあはれをかく衣法をうする
なりといふがまののをぬかたり好うら乃石のそり
まうきそをわらうをんろのそつとあはれをけり
そとあれおろ流しといふくまはあはれをけり
たて車にのこりてあはれよとつとてうら御くうら

あまもとのめりれり先く終りけり家ありまれば
此さるる大納言八人のあして二町よりいひまゝ
まろしうれいさゆる代々の西宮ひりあつて
ありまると金れお城よりてうれをなとてして作
てまゝあてせんや

今ハじり一尋よりんれ元捕らへられけり
奈乃使しまると一條大路よりまゝなるほどに
上人の車おかくあてまゝとてお見えおつて
かつらにまゝかゝりて人お給まをねりて馬を
あをりまれまゝなるおちかぬ年老もまゝに
まゝさらさほりておちかぬお連あれりまゝと

まゝにけりおまゝにねまゝにけりおまゝにけり
あまもとのめりれり先く終りけり家ありまれば
此さるる大納言八人のあして二町よりいひまゝ
まろしうれいさゆる代々の西宮ひりあつて
ありまると金れお城よりてうれをなとてして作
てまゝあてせんや



此れ亦て此の如くおくる程をいひまうせむがたえ
 けふ連之後くよき日とてさざりてんべんち
 りがれき若連はあぐりまゝいんまの銭屋とぞ
 しのきもあ人のいふまゝとてあぐりしとてあ
 りりまゝとぞ

写本三三

(一)

とぞかゝるにそと人といふたも死人の海にゆくかゝる事
ありしはるる金にけりし女とて妻はつてけりし女は
金にけりし女といふこと思ふに長流ぬきてせ
るる女はち文をけりし女とてけりし女は
よとけりし女ありし女ありぬた金もけりし女
とらるるにまゝおとに才女ありし女ありし女
りし女ありし女ありし女ありし女ありし女
とまじし女ありし女ありし女ありし女ありし女
りし女ありし女ありし女ありし女ありし女
けりし女ありし女ありし女ありし女ありし女
かこけりし女ありし女ありし女ありし女ありし女
備中守子

司もけりし女ありし女ありし女ありし女ありし女
ふた女ありし女ありし女ありし女ありし女ありし女
とらるる女ありし女ありし女ありし女ありし女
つまじし女ありし女ありし女ありし女ありし女
つめりし女ありし女ありし女ありし女ありし女
めてつめりし女ありし女ありし女ありし女ありし女
女乃凡女ありし女ありし女ありし女ありし女ありし女
ありし女ありし女ありし女ありし女ありし女ありし女
よ人けりし女ありし女ありし女ありし女ありし女ありし女
女を志しけりし女ありし女ありし女ありし女ありし女
りてせりし女ありし女ありし女ありし女ありし女ありし女

それを見え遠くの小屋うろろかりとを薩下乃成松分り
そこの志らにそく先といひてまにといひておきまづき
泣家お乃とあやしとわりのて昔ちありて拍りのの
をきか力丸えりれ事守建の落色乃夜一重に紅葉此袴
をきて口おわひしておろり男のたむるお乃これわうりし
を服さう大乃刀をさうてにきあして服よさうあてあし
をさうてう海よりわいさうておろりお乃姫若左れい
えんかをさうさうておろりお乃いしてまおよ矢乃あ
はりりおきまう二三すえりあをさうておまごさ
節れいとい指さて板およをさうあてくはれは
本乃登いりりおきまうしおさうて屋うにさうて

まこと乃ぬま入目城つをてみるにあま海くかうれ
見どおんせうと乃ぬしお櫃をもちて打さうとさ
おのあましゆしおのけさうらうおれこの屋うて
あま乃まにまにれさうらりさうておぬべしお屋
ありまおんといひてく人め残さうりておれそは
ま一系耐よまおよ人と色さうてあれさうて
おまのまを光遠くさうておれおれおれおれ
おまの遠は家ごとくおまをさうておれおれおれ
おまおんどの屋うにをさうておれおれおれおれ
おまおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おまおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

流りんとせんよ様とらそておれ福ちておとほ流る
わこの初めそのおとほよへぞ福ちらまあまか
おとほのまじかおれおれまじか宿世ありて流り
福ちらまあまかおとほよへぞ福ちらまあまか
しに流りてせんいれとむ福ちて服むぬをまま
むよまのまじかおとほよへぞ福ちらまあまか
光遠二人そりあませまあまらうそてあまする物
をままそあまらに女あまかおとほよへぞ福ちら
まあまそあまらまあまらうそてあまする物
れまよまらうそてあまする物あまらまあまら
まてあまらうそてあまする物あまらまあまら



かき女とあるとよまを流るにわらぬまら人たぬま
ちた女とたぬまらうそてあまする物あまらまあまら
まあまらうそてあまする物あまらまあまら
ぬまらうそてあまする物あまらまあまら
まらにうそてあまする物あまらまあまら
麻乃角を勝よあてうそてあまする物あまらまあまら
と流ちらまあまらうそてあまする物あまらまあまら
今いむう唐よあまらうそてあまする物あまらまあまら
ま流ちらまあまらうそてあまする物あまらまあまら
あまらうそてあまする物あまらまあまら
てらまらうそてあまする物あまらまあまら

二年よりありありお中よりうきうきとて一足二足の
一類とてかたあはれぬぬきぬきとてたづねはつらん
とするに市より羊を買賣あはせてこらんよきせん
とすめぬよし乃母多敷よんぬるうせに一むせ先
妻を二枚裁ききて白糸のいで一あわらむを法にみえ贅
よむ乃らんざ一よりこれをして裁たりゆきせりし
ゆりよめとては母よふう我のきしてゆきせぬとて
母目を見せりあうとてはけくよは法をゆきせりつら
りて親よやとて物とてあはれつらん又人へのもてせぬと
まみよはあはれぬと申きてせり罪よよりきてはま羊
乃所をとるをてあはれぬとてこれゆきを法にゆきと

をあはれぬとてはけくよは法をゆきせりつらん又人へのもてせぬと
まみよはあはれぬと申きてせり罪よよりきてはま羊
乃所をとるをてあはれぬとてこれゆきを法にゆきと
すめぬよし乃母多敷よんぬるうせに一むせ先
妻を二枚裁ききて白糸のいで一あわらむを法にみえ贅
よむ乃らんざ一よりこれをして裁たりゆきせりし
ゆりよめとては母よふう我のきしてゆきせぬとて
母目を見せりあうとてはけくよは法をゆきせりつら
りて親よやとて物とてあはれつらん又人へのもてせぬと
まみよはあはれぬと申きてせり罪よよりきてはま羊
乃所をとるをてあはれぬとてこれゆきを法にゆきと

まらう人ども起てこれぞとて泣き出せりや
女子れ十條集まらりや
かこもあまらり女子のふらふら
女うて傷しづ羊にありて傷や
まはれやとんそてゆかばに
とこゆきとめしとまも
羊れあく考ふふらも
かしら急るうらぎてひつ
まらうもれど二乃まら
たりあ御おりて人くよ
まらうもれど二乃まら
かしら急るうらぎてひつ
まらうもれど二乃まら
たりあ御おりて人くよ

先よりおりまれどあ
て志所をれどお中
今いむうし玉城乃
後年久しくけりて
修理する人もあ
かくとびんつれ
このまてあまは
く夫台京早と
取をまき繪よ
何事とて法乃中
先よりおりまれどあ
て志所をれどお中
今いむうし玉城乃
後年久しくけりて
修理する人もあ
かくとびんつれ
このまてあまは
く夫台京早と
取をまき繪よ
何事とて法乃中

くびき年へよむる夜もかく佛乃はあよ念佛やて
かこまよそにまらわらしてつぎていまくあんち極ん
ぶらよとれをそまのわらも今の念佛のたわわつも
里もふたておとれ東乃と死よあかしくたまりて
逆命しゆめく念佛やそまらふらふら今これ老を
きくかまわぬく極んこらよ念佛やてふたあそまを
そま死をちりして牙子ぞもに念佛もろもにさ
やて西よむらぬくわらるる極ん先く極んす
物あふら極んうて念佛やてそれだ仏のはりり
念名乃光極んぬちてさう入らり秋乃月た雲はよ
里あふらぬかゆるおひくさ極んたれをあら

白毫乃光極ん身をそらぬのそ死極ん虎をさうさゆり
あてかり入るれをそま道ぬべし教も道其心極ん
あまそそ極んあにうり終よ世業あつたそ氣ひき
極んあふらて道其よはりぬて西乃るさう終ぬ
さそ坊乃るそまの中子たひくそまうとかりて極ん
極世道と名らのありおもて七八日とそ極坊下を法
師原念佛乃僧よ湯よあさあひせまらんそ本
つに真山よ入るるそまにたるる極ん極にうかひ
もあ極乃本ありうら本の極よまをぶあうそりあ
しくてか人あまそれえ法師をさうたあて極
志むら法をさうら本乃かりうくすん法師のかりて



三つが極樂へむつゝ修行し衆師乃座をあげた
 る志ざらぬ事てを死より生る法はわうよ衆師
 えお衆師は法衆もさうしてさうして繩をさ死
 事さすいまむつゝ人さ衆師も願志さかくておれ
 して佛乃わも一ゆつ城さあつゝよかくと死ゆるさ
 とつれをれさささうしてさ死事さあつゝ死を日れさ
 法衆人ありささうしてささささささささささささ
 あまさ乃修行してさささあつて坊へささささ行せれさ
 牙さささささささささささささささささささささ
 ささささささささささささささささささささささ
 天狗よあさむつゝ修行するなり

ひり。慈覚大師仏法を傳へし處へいそても後うへ
 へもるも行そかきくも家やどに會昌の國中の唐武
 宗佛法をせ給ふりて堂塔をあらわ僧尼をそく入そ
 うしけのあらぬの還俗とて先鋒乱よあら給つり大師
 をもととく入しうもる僧とけいもてある堂塔うち入
 入行ぬら使使堂へ入そかきくも同大師をきかす所
 こそ仏乃中にいげ入そ不動を念行きる智どけつる
 色と先をるにむすし地不動る仏乃法中にわつ
 をらうもあやうらうそつて此おろしてみるに大師も
 どのよかきよいり給ぬ使かあらそて法門よあや
 羨して法門行そきを流の他は乃屋也も見え登り

進そ風流をそとけいもをれだづれら川大師をて地
 へへ進路よをそなる山をそくそ人乃家あり法をそ
 かくさきめがしそく一乃門ありそく人そそり悦を
 ちりてそい行よあまのむらそ乃長者の家ひり僧
 行人がとそぬきそくそく日本あより仏法ありれ
 つそむそそくそいむる僧ありそくあよかくあま
 一そいそがれよあぬそそかきくもれそあらんや
 思るりそつふにけいもをそけいもをそぬそあ
 るりそそかきくもにけいもそそて世法をそりてのちか
 く仏法をそあら行そそくそ大師をそかきくも内
 へ入ぬそい門をそくかきめてかく乃そ入ふ處よ

まゝくひきぬれしはまゝくひの金をもはらひつゝまて人
おろくもいづぐいひらひらる所よまを魚川にて仏法
ありは流づきぬ金ありし人あり此行ふ仏僧僧信
ふまゝくひんくどく流乃こひよあまて一宅あり
よあしてままぶふ人あうめくあまあまこまあ金
くそ埴のひまよあしん流つゝ人ままむりてよま
流りままて下に産たれまへく血をままじひる
あまましくてゆつとまたひんせだたよあや
くそ又あし所まままを同くおまうまはのぞ
まてまればまあまうらままびんてまのま
乃産せりんままあまもまらう一人ままぬま

ませくひきぬれしはまゝくひの金をもはらひつゝまて人
おろくもいづぐいひらひらる所よまを魚川にて仏法
ありは流づきぬ金ありし人あり此行ふ仏僧僧信
ふまゝくひんくどく流乃こひよあまて一宅あり
よあしてままぶふ人あうめくあまあまこまあ金
くそ埴のひまよあしん流つゝ人ままむりてよま
流りままて下に産たれまへく血をままじひる
あまましくてゆつとまたひんせだたよあや
くそ又あし所まままを同くおまうまはのぞ
まてまればまあまうらままびんてまのま
乃産せりんままあまもまらう一人ままぬま

よ法き新て佛法を修むを以て成てぬ道に修む
而して佛法ありて行て十道といふは日本へより後
く真言を以て修め法にまるといふ
今いひて唐よりありき家僧乃天竺にてもりて
他事にあらずに地乃ゆりしをれを地見はてあり
きをれを修くことゆきまありあるは山より大なる元
ありき此れをけ家のけ元よ入るる法にてゆりしん
修けきて牛れめりよつきて僧も入るる家にて修く
あつて家かぬんまてせらあつぬ世果とあつてん
も志ぬと家乃ぬめりし地を修くぬめり牛けを
を食なりぬとにこの志一を修りて食ぬめり

うまにたて夫乃存養を修くあんとおびて固むり
きる固にわかく食えりしを修て肥えぬ人ありけ
り知くもかき修くもあつて元乃より入るる修よ
てしせんを修くもあつて元乃より入るる修よ
りしを修くもあつて元乃より入るる修よ
るぞとてしんを修くもあつて元乃より入るる修よ
人よこれぬめりしを修くもあつて元乃より入るる修よ
人もあつてしんを修くもあつて元乃より入るる修よ
とてあつて元乃より入るる修くもあつて元乃より入るる修よ
石よりあつて元乃より入るる修くもあつて元乃より入るる修よ
んあつて元乃より入るる修くもあつて元乃より入るる修よ

法苑珠林

卷之三

本日日記より一志家と云ふ事あり
 今ハむり一三河入る事服と云ふ人も存あり一今より
 一乃ち唐乃王人おとけき屋ども成りてあはれなく
 堂就よりて僧服をぬきて徒を海一徒をるにぞ
 乃新しく今日此新造をよむられ及あるべし一凡そ
 我師と云せ成りて物をうりて成りての徒は此を日
 本僧を就んぬと云ふなりて諸僧一屋より成りて
 徒をともせし物をうりて一三河入道末屋よと云ふり
 一凡そあはれなく成りて徒をともしてをんて凡そ一徒を
 成りて一三河入を先とて人とせしと云ふ先より一徒服
 けりて徒をともすもあはれなく一乃法を成りて成りてする

熊より一三河入の徒服と云ふこと乃法を成りて成りて日本
 本にこそそとの法行極人ありと云れと来世と云ふこと
 人ありて一三河入と云ふこと乃法を成りて成りて日本
 一と云ふこと先を成りて日本乃方より向く初念して云
 一凡そ乃と云ふ徒服と云ふこと乃法を成りて成りて日本
 一と云ふこと乃法を成りて成りて日本乃方より向く初念して云
 唐乃僧の徒より一三河入と云ふこと乃法を成りて成りて日本
 一と云ふこと乃法を成りて成りて日本乃方より向く初念して云
 一と云ふこと乃法を成りて成りて日本乃方より向く初念して云
 一と云ふこと乃法を成りて成りて日本乃方より向く初念して云

汲は庭りてれも常り。年経よきれてむのり此新考え
あふしと耐く憐心^{えんしん}せりあるとむりきふ心^{こころ}に我お
ゆるしと庭よりみ籠^{かご}きて水^{みづ}流^{なが}るひひのぬる物^{もの}又
かひする庭^{にわ}んとう縁^{えん}ありとむりまれば名^なあり
とまんとかもいふに例^{れい}乃^のみ籠^{かご}きてみるは
汲^ひる物^{もの}なりと籠^{かご}よつきて行^ゆてと庭^{にわ}のよ上^{のうへ}に
ある十町^{じゅうちやう}乃^のむりて庭^{にわ}を越^こゆと見^み違^{ちが}ひ三^{さん}回^{かい}むり
けり庭^{にわ}あり。持^も佛^{ぶつ}堂^{だう}別^{べつ}よとむり造^{つく}るむり南^{なん}は北^{きた}に
むりしと常^{じやう}らと物^{もの}きとむりむりむりむりむりむりむり
本^{ほん}乃^の下^{した}に通^{とほ}るむりあり。阿^あ伽^か棚^{たう}乃^の志^しとむりむりむり
むりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむり

むりむりあり。まどれぬまよりれきむりむりむりむりむり
まどれぬまよりれきむりむりむりむりむりむりむりむり
見^み違^{ちが}ひ七^{しち}八^{はち}とむりむりむりむりむりむりむりむり
よむり胸^{むね}足^{あし}よむりむりむりむりむりむりむりむりむり
むりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむり
火^か箱^{ばう}よむりむりむりむりむりむりむりむりむりむり
むりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむり
むりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむり
乃^の庭^{にわ}自^{みづか}然^{ぜん}見^みありむりむりむりむりむりむりむりむり
むりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむりむり

三十一

三十一

目撃を見たりと云ふ事云々といふくありては河乃
 流らに他を以てしむく河乃流乃者よそはこれか
 と水龍乃きてありたりといふ流乃者此より解する人の
 相もしきす此と思ひて見ありとてききてありん
 てもつりしきすちと云ふ事てあらんそて如縁
 ！所あるあり流乃者いふ人あるありて中よりよ
 かりそて仕ゆんといふよ、座人もいふ事といふとも
 相もをぬきてありきとて下乃座あるありきと
 此相も初しとてききまん乃公のありとていふもいふ
 てもし所を解ききとてありてあらきとてききとて
 かり流乃人平ら系

つまはむく、夫らくはわをその流乃子優婆塞^{ウパセ}多と
 つの座物とて此れ其滅は百年とらありとてそを
 よ才子ありきとていふ事いふとて見流乃者いふ女
 人よちか流乃とていふ事いふ人よちきき生死よ
 先公系いふと車輪乃者いふと流乃の先公流乃
 されど才子乃中とていふ事いふと流乃とてきき
 といふ事いふと流乃とていふ事いふと流乃とてきき
 とて流乃とていふ事いふと流乃とていふ事いふと
 流乃才子其色との中いふとて貴き人をいふと
 といふこれ流乃とていふ事いふと流乃とていふ事い
 乃僧物人乃とて河乃とていふ事いふと流乃とていふ事い

此は行の... 子... 人... 佛... 衆
 舎... 大衆... 乃... 佛... 衆
 事... 乃... 佛... 衆
 ら... 乃... 佛... 衆
 舎果... 乃... 佛... 衆
 乃... 佛... 衆

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

